

平成23年 6月15日現在

研究種目： 基盤研究(C)
 研究期間： 2006-2009
 課題番号： 18520400
 研究課題名(和文) 日本語学習者のための「デジタル文法辞典」の開発
 — 動的イメージで示す文法の「コア」 —
 研究課題名(英文) A digital dictionary of Japanese grammar for learners

 研究代表者
 菊地 康人 (KIKUCHI YASUTO)
 東京大学・国際本部日本語教育センター・教授
 研究者番号： 40153069

研究成果の概要(和文)： 本研究では、日本語学習者が、必要な文法知識をeラーニングにより動的なイメージでコンパクトに理解できるような「文法学習のツール」を開発した。開発は、(1)「動詞の活用」に関するもの、(2)主要な「格助詞」に関するもの、(3)主要な「構文」(あるいは構文を構成する主要な言語形式)に関するもの、の3系統に分けて行われた。他に、狭義の文法ではないが、(4)「音と文字の学習」に関するコンテンツにも取り組んだ。これらの成果は、研究代表者・分担者の所属機関の日本語教育に実際に活かしており、他機関への公開に足る整備を現在行っている。

研究成果の概要(英文)： This research developed various tools of learning which facilitate Japanese language learners' understanding of Japanese grammar by using the dynamic image of e-learning. These studying tools include 1) tools for learning Japanese verb conjugations; 2) tools for learning principal case particles; 3) tools for learning basic constructions; and 4) tools for learning Japanese characters and pronunciation. These developments are being utilized in Japanese language learning at our university and the results are being prepared for publication.

交付決定額 (金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,100,000	0	1,100,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総計	3,400,000	690,000	4,090,000

研究分野：日本語教育

科研費の分科・細目：人文学・言語学

キーワード：日本語教育, 文法, デジタル文法辞典, 文法項目のコア, 動的イメージの視覚情報

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本語学習者に「自習用のコンパクトな文法教材」を求めるニーズがあることを、

研究代表者らはかねてから認識しており、これに対応したいと考えていた。

(2) 研究開始当時は、折しも web による学習が伸張しつつある時期であり、「動的イメージの視覚情報」や「音声情報」を利用することが十分可能な段階にさしかかっていたため、これを利用して、学習を容易にするような上記(1)の教材を開発したいと考えた。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、日本語学習者が、必要な文法知識を、web 上の学習により動的なイメージでコンパクトに学習できるための「文法学習のツール」を開発することを主な目的としたものである。

(2) 主な特色は次の通りである。

- ① 提供形態：PC 上のデジタル教材として、CD-ROM または web 上での公開を図る。
- ② 記述の方針：細かすぎる記述を避けて、可能な限り「コア」的な内容を抽出してコンパクトに示す。
- ③ 具体的な方法：PC 上のアニメーション機能の活用による「動的イメージの視覚情報の提示」と「音声情報の付加」により、学習者の理解を高める。

3. 研究の方法

(1) 「学習者にとって必要な情報はどのようなものか」「学習者にとって習得しにくい点はどこか」などに留意し、「どのような情報を、どのように提示するのがよいか」を十分に検討する方法をとった。「どのように」には、「どのような画面を作成・提示するか」「どのような順序で提示するか」「どのように気づきを促すか」「どのようなタスクをかけるか」などが含まれる。

(2) これらの検討にあたっては、日本語教育学・日本語学・認知言語学・学習心理学・e ラーニングなど各領域の先行研究を参照する点も多かったが、研究代表者・研究分担者の日

本語教育の現場経験を踏まえた点も多かった。

4. 研究成果

研究成果は、(1)「動詞の活用」に関するもの、(2)主要な「格助詞」に関するもの、(3)主要な「構文」(あるいは構文を構成する主要な言語形式)に関するもの、および(狭義の文法ではないが)、(4)「音と文字の学習」に関するもの、の4系統に大別される。

(1) 「動詞の活用」に関するもの

① 文法学習の大きな柱である「動詞の活用」の学習を多面的にサポートする web 教材を開発した。動詞の各グループの活用パターンやグループ分けについて気づきを促すタスクを効果的にかけることで、学習者が自ら主体的に「活用の仕組み」を発見・検証でき、その上で基本形から活用形へと変換できるように導くものである。

② 日本語の動詞活用では、「グループごとに活用のルールが異なる」「グループの識別要素 (iru・eru/その他, またはu/る) の抽出が困難である」「一段動詞と五段とでは、語幹 (不変部) と語尾 (変化部) の分節方法が異なる」などの難点があり、これらがしばしば初級学習者のつまずきとなってきた。ところが、これまでに存在した「活用の学習をサポートする e ラーニング教材」での主な学習は、単に「活用に関するルールを提示・解説」した後、「基本形 (辞書形。教材によってはマス形) を与えて、その活用形 (ナイ形・可能形等) を生成させる変換練習を繰り返す行う」とどまるものであった。

③ そこで、本研究では、上記の困難点に配慮し、従来の教材では「提示・解説」されてきた活用ルールを、学習者が段階的に理解、獲得していけるような教材を開発した。その新しい点は、学習者が「自らの手を使って、

PC上で情報を整理していくことで、意識的に学習していく」ことを目指した点である。これにより、従来の教材の「出題」「正誤判定」「正解提示」といった役割に加え、これらに先立つ「ルールの発見と検証のツール」としての機能を持たせることができた。具体的には、例えば、机上で多数の動詞カードを活用グループ別に分類したり、紙の上で動詞語彙の文字列の語幹と語尾を色ペンで塗り分けて整理するといった「思考をともなう具体的な作業」を、PC上においても実現し、さらに音声・視覚情報による効果的学習の誘導など、eラーニング教材ならではの特性を活かしてこれを発展させた。

④ コンテンツは大別して、a) 動詞の語末の形・音の特徴に気づかせるタスク、b) グループごとに活用パターンが異なることに目を向けさせ、グループ分けの必要性に気づかせるタスク、c) グループ分けの方法をサポートするタスク、d) 各グループごとの活用規則を獲得するために、動詞語彙の語幹と語尾を分節する方法をサポートするタスク、e) 実際に基本形から活用形を導き出すタスク、に分かれる。

⑤ 本教材は、こうした段階的な学習を踏んでいくことによって、日本語の動詞活用のしくみを学習者自身が発見、検証していきながら主体的に学んでいくことを可能にするが、同時に、学習者のつまづきが、複雑なプロセスのどの時点で起こっているかを学習者自身が（教授者も）認識できる点も、意義として重要である。

⑥ 研究成果は、2008年5月の日本語教育学会で発表し、各方面の関心を集めた。研究代表者・分担者の所属機関（東京大学日本語教育センター）では、実際にこれを日本語教育に活用している。

(2) 主要な「格助詞」に関するもの
格助詞の「コア」を動画で示す教材を作成した。例えば、場所を表す「に」「で」「を」の各格助詞の使い方（「公園に入る」「公園でキャッチボールをする」「公園を散歩する」）の理解は、多くの学習者にとって困難であるが、本教材では、これら各格助詞の「コア」を動画で示し、学習者が視覚的にそれぞれの助詞の使い方の違いが理解できるようにした。

(3) 主要な「構文」（あるいは構文を構成する主要な言語形式）に関するもの

① 日本語学習の主要な「構文」（あるいは構文を構成したり、文を連結したりする主要な言語形式）として、例えば、受身文、使役文、可能文、「XはYがZ」文；「んです」、「わけです」；やりもらい；「てある」「ている」「ておく」などの補助動詞群；「したがって」「しかも」などの接続詞群；「のに」「ても」などの接続助詞群など、種々のものがあるが、これらにつき、学習者が適切に理解したり実場面で使えるようになったりする上での困難点とその原因の分析を進め、それを解決する望ましい提示・指導方法について具体的に検討した。

② このうち一部については、当該形式の意味の「コア」を動画で示したり、また、ヴォイス絡みの形式については当該形式の文が与えられた場合に行為者を判断する聴解と連動するタスクをかけたという形で、コンテンツに至っている。

③ コンテンツ化には至っていないものについても、基礎作業としての分析を進展させることができ、論文・口頭発表等に結実した。

(4) 「音と文字の学習」に関するもの

日本語学習の第一歩としてほぼすべての学習者が経験する「かな学習」を支援する web

教材を作成した。

①イントロとして「音体系の提示」から入ったこと、②濁音・撥音・促音・長音などの特殊音について視覚的にわかりやすく導入したこと、③ポイントをコンパクトにタスク化したこと、④特に、単語のディクテーション問題では、学習者の誤答に対して、すぐに正解を示すのではなく、間違いの箇所を指定して再入力を促すなどのフィードバックシステムを添えたこと、などの特徴をもつ。

研究成果は、2007年10月の日本語教育学会で発表し、各方面の関心を集めた。研究代表者・分担者の所属機関（東京大学日本語教育センター）では、実際にこれを日本語教育に活用している。また、同じ大学の他の日本語教室にも、求めに応じて提供してきた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計11件）

- ① 菊地康人，「日本語を教えることで見えてくる日本語の文法—「XはYがZ」文と「YがZ」句—」，『日本語文法』，査読有，10巻2号，2010，22-38.
- ② 菊地康人，「日本語の文構成原理と、「が」の文構成上の機能」，上野善道監修『日本語研究の12章』，査読無（依頼原稿），2010，117-133.
- ③ 菊地康人・増田真理子，「初級文法教育の現状と課題—「です・ます完全文」をテンプレートとする教育からの転換を—」，『日本語学』，査読無（依頼原稿），28巻10号，2009，64-74.
- ④ 前原かおる，「「てから」小考」，『東京大学留学生センター教育研究論集』，査読有，16号，2010，1-13.
- ⑤ 菊地康人，「「ておく」の分析」，『東

京大学留学生センター教育研究論集』，査読有，15号，2009，1-20.

- ⑥ 菊地康人，「敬語の現在—敬語史の流れの中で、社会の変化の中で—」，『文学』，査読無（依頼原稿），隔月刊9巻6号，2008，8-23.
- ⑦ 菊地康人，「受身は「難しくて役に立たない」か—現場から考える「初級文法教育，こうしたら」—」，『AJALT』，査読無（依頼原稿），30号，2007，18-22.
- ⑧ 菊地康人，「受難の「んです」を救えるか」，『言語』，査読無（依頼原稿），35巻15号，2006，6-7.
- ⑨ 菊地康人，「主題のハと、いわゆる主題性の無助詞」，益岡・野田・森山編『日本語文法の新地平2 文論編』，査読無（依頼原稿），2006，1-26.

〔学会発表〕（計12件）

- ① 菊地康人，「日本語を教えることで見えてくる日本語の文法—「XはYがZ」文と「YがZ」句—」，日本語文法学会第10回大会記念フォーラム（講演），2009.10.24，学習院女子大学.
- ② 増田真理子，「観察をとまなう会話教育の実践と〈学習者〉〈教授者〉〈教室〉」，日本語教育学会（パネル「「会話教育」の方法と展開—相互行為としての「話す力」の養成をめざして—」），2009.5.23，明海大学.
- ③ 李相穆・増田真理子・前原かおる・菊地康人，「表記の学習支援を目的としたweb教材「日本語かつくん」の開発」，日本語教育方法研究会，2009.3.21，神奈川大学.
- ④ 菊地康人，「「てある」文から格助詞「が」を考える」，関東日本語談話会，2008.7.26，学習院女子大学.

- ⑤ 菊地康人・増田真理子・前原かおる・李相穆, 「動詞活用の理解・習熟をサポートする Web 学習教材 — 学習者が主体的にルールを獲得するために —」, 日本語教育学会, 2008. 5. 25, 首都大学東京.
- ⑥ 前原かおる・増田真理子・李相穆・菊地康人, 「PCとモバイルを併用した, かな学習環境の開発—学習者の認知過程に配慮して—」, 日本語教育学会, 2007.10.7, 龍谷大学.
- ⑦ 前原かおる・増田真理子・李相穆・菊地康人, 「日本語の意味的・構造的理解を強化するための聴解型オンライン学習教材の開発」, 日本語教育方法研究会, 2007.9.22, 京都教育大学.
- ⑧ 増田真理子・大関浩美・前原かおる, 「初級段階から始める「複雑な文構造」に対応する読解力の養成 — 連体修飾節を題材に —」, 日本語教育学会, 2007.5.27, 桜美林大学.
- ⑨ 増田真理子, 「談話における「添加」接続詞 — 「しかも」を中心に —」, 談話分析コロキウム (山形大学), 2006.12.23.
- ⑩ 前原かおる・小西円, 「日本語における「少なさ」の表現をめぐって — 「数量表現+だけ」を中心に —」, 日本語教育学会, 2006.5.21.

〔図書〕 (計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 出願年月日：
 国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 取得年月日：
 国内外の別：

〔その他〕
 ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菊地 康人 (KIKUCHI YASUTO)
 東京大学・国際本部日本語教育センター・
 教授
 研究者番号：40153069

(2) 研究分担者

増田真理子 (MASUDA MARIKO)
 東京大学・国際本部日本語教育センター・
 准教授
 研究者番号：30334254

前原かおる (MAEHARA KAORU)
 東京大学・国際本部日本語教育センター・
 講師
 研究者番号：10345267

大関浩美 (OZEKI HIROMI) [2008 年度まで]
 東京大学・留学生センター・特任講師
 研究者番号：50401584

(3) 連携研究者

なし

